

# イングランド・ウェールズの中世城郭と 都市の空間構造

——比較都市考古学の視点から——

前 川 要

---

はじめに	3 日本中世城郭や都市との類似点と相違点
1 中世城郭の変遷	おわりに
2 ヨークでの事例研究	

---

## 論文要旨

本稿では、アジアとヨーロッパの辺境に位置する日本とイギリスの中世城郭と都市の空間構造を比較研究することを目的とする。方法としては、考古学・地理学・歴史学などの手法を学際的に用いて、イングランドとウェールズの城郭史を大局的に捉えて、その後、ヨークを用いて事例研究を行い、最後に日本との比較検討をする。従来の研究では、城郭と都市を統一的に空間分析する視点が欠如しているし、いくつかのものを除外して個別城郭の解説に終始して、社会的背景にまで論及したものは多くない。先ず、中世前期のありかたは、「モット・ベリー」型と呼ばれるもので、木造から石造へと変化する。13世紀頃には、天守(Keep)をもったものが出現するが、ウェールズでは、エドワード1世が、天守をもたない新しい型式の城郭と都市を建設していく。14世紀前半にかけては、城郭構造、戦闘技術とも最高潮に達するが、14世紀後半になると、築城技術は停滞する。16世紀になると、大砲やハンドガンの普及のため、ほとんど戦闘が野戦中心になって、17世紀になると、中世城郭は衰退してしまう。ヨークの事例研究の項では、都市の要素として重要な、大聖堂、修道院、城、城壁と城門、町屋等に注目して検討した。結論部分では、大聖堂と城郭とのありかた、再建のされかた、都市計画、建物の類型、築城技術と防御、都市の墓地、などの差異についてみた。ウェールズの城郭や都市と日本の近世城郭の共通性を論じ、日本の織豊系城下町の枠組みが、ヨーロッパから導入された可能性を述べた。さらに、都市のみならず、周辺の村落(廃村)や環濠集落についても若干述べ、都市の歴史が両地域の間でかなり相違が見られるのに対して、村落の歴史にかなり共通性がみられると考えた。